

1・2歳児のやさい栽培日記 ～つくる、たべる、たのしい、またつくってたべたい！～

社会福祉法人喜慈会 子中保育園

野村美樹・伊藤千晶・桑田幸生・大塚裕子

はじめに

本報告は、子中保育園の1・2歳児が行った2019年6月から10月までの野菜の栽培と収穫についての記録である。当園では、子どもたちによる畑作業を重視している。大人がつくる立派な畑を子どもたちが手伝うのではなく、子どもたちと何を育てたいか話し合い、種まきや苗植えを一緒に行い、水遣りや草むしりをする。収穫した野菜を昼食やおやつで食べることができる。給食で出た生ゴミや残飯をコンポストに運んで肥料にもしている。

今年度は「たのしい、おいしい、またたべたい」を食育計画目標に掲げ、子どもたちが楽しみながら食に関わる意欲を持てるようになることをねらいとした。野菜栽培や調理活動を行うことを前提に、

つくる → たべる → たのしい → またつくってたべたい！ → つくる …

といった、子どもたちを主体とする食体験サイクルの実践計画を立てた。

これまで、1・2歳児は年上の子どもたちのお手伝いという役割が多かったが、今年度は1・2歳児が主体となり、全園児が関わる野菜栽培とは別に、にんじんやきゅうりを育てることとした。1・2歳児でも活動を通して、野菜に対する興味・関心や、慈しみ育てるといった感情、「自分たちで育てる」「自分たちの畑」という主体性につながる意識を持てるようになったためである。1・2歳児にとっての主体性の土台は、「たのしい」「やりたい」が積み重ねられるような実践環境によって形成されると考えている。

以下、2019年度の1・2歳児(後半は0歳児も加わった)の野菜栽培活動を保育士らの日誌や写真などの記録をベースにした栽培日記として編集した。吹き出しに示した言葉は、実際に子どもたちが発したものである。文中の、丸かっこの数字は写真番号である。

やさい栽培日記(2019年度)

6月7日 種まきに向けて(1歳児)

1歳児クラスの子どもたちは、0歳児に向かって「かあいい(可愛い)」と表現する。自分より“小さい”子に向かって優しく接しようとする姿からヒントを得て、種を赤ちゃんに見立てることとした。これにより、興味・関心とともに、大事にするという感情も持てる。にんじんの種と袋の写真の指しながら、「これ、にんじんね」「種はにんじんの赤ちゃん」と伝える。すると、1歳児 A は顔を近づけ、優しい表情で種を見た(1)。同じく B も興味を持ったように傍にやってきた(2)。「種は赤ちゃん、土はお布団、水はご飯ね」と伝える。



6月12日 にんじんの種まき(1・2歳児)



種まきの直前に、2歳児にも種はにんじんの赤ちゃん、土は赤ちゃんのお布団、水はご飯と伝える。子どもたちにとって理解しやすかったようで真剣に聴く。



子どもたちの手つきから、種を大事に扱い、優しく土をかける様子が見て取れる。



大きくな～れ

大きくな～れ

1歳児も2歳児も丁寧に水をかける。2歳児はじょうろで水をかけながら、おまじないのように「大きくな～れ」と何度も唱えていた。種を赤ちゃんに見立てた説明は、子どもたちの行動にも影響があったと見える。

C、持てるよ～

6月13日 ミミズと遭遇(1・2歳児)



種まきの翌日、1・2歳児はにんじんの水遣りをした。するとにんじん畑に大きなミミズが！保育士が手に取り持ち上げて見せると、「キヤー」と逃げる子、物珍しそうに覗き込む子、自分も触りたいと手を出し触って観察する1歳児 A(3)、

「Cも持てるよ～」と掴んだものの動くミミズに驚いて慌てて手を離す2歳児 C(4)、といったように、子どもたちの反応は様々。ミミズのうんちは畑の栄養になるからとても大事という保育士の話を、子どもたちは「えー、うんちー？」と笑いながらも、ふざけずに聴いていた。

6月17日 にんじんの芽が出た！(2歳児)

こっちにもあったよ！



にんじんの芽が出た。夕方、残っていた2歳児4名で畑に行き、観察する。「これがにんじんの芽ね！赤ちゃんだよ」と指さしながら伝え、子どもたちも大喜びで反応し、他の芽も探した。みんなで「大きくな～れ」と願いを込めて。

赤ちゃん！

大きくな～れ



6月18日 1歳児 B、野菜を食べ始める(1歳児)

野菜が苦手な B。畑作業を始めてから、少しずつ給食で出る野菜が食べられるようになった。この変化を日々連絡帳で伝えていた。6月18日の連絡帳には B の母から下記のようなメッセージ。

「B、今日もにんじん食べたの？」と聞くと、「うん！」と自慢げに力強く答えてくれました。

保護者と園の情報共有に加え、活動に対する保護者の関心や励ましは、子どもたちの食育に欠かせない。

6月19日 にんじんの水遣り、きゅうりの種まき(1・2歳児)



「にんじんの赤ちゃんいるかな？」と保育士が問うと、1歳児 B は 1 ミリほどの芽を指さした。遠くから指していたので「ツンして教えて」と言うと、昨日まで気づかなかった小さな芽を指さす(5)。毎日畑に通っていると、小さな芽であっても子どもは関心を持って観察する。そのことに気づかされる。

畑から園舎に戻ると、1・2歳児合同でプランターにきゅうりの種を蒔く。プランターならば保育室からいつでも容易に観察することができる。にんじんのとき同様、保育士が「これがきゅうりの赤ちゃんね」と種を見せると、子どもたちも「きゅうりの赤ちゃん」と応答する。保育士が「きゅうりの種はにんじんの種より細いね」と説明すると、実際に触りながらじっくり観察する姿が見られ、興味を持って取り組む様子が伝わってくる。指で土に穴を開け、種を落とす。「やさしくお布団かけてあげてね」と言うと、

きゅうりの赤ちゃん

D、お野菜、食べれるね



丁寧に土をかぶせた。種まき作業をしながら、野菜嫌いの2歳児 D が「D、お野菜、食べれるね」と宣言していた。

6月20日 苦手なきゅうりを食べる(1・2歳児)

今年から入園してきた2歳児 D。最初は環境に馴染めず白いご飯しか食べられなかったが、4月の中旬頃から好きなお肉、カボチャやイモ類は食べるようになった。しかし、にんじんや葉野菜などは苦手で、「お野菜、食べないね」と首を横に振っていた。



きゅうりの種まきの翌日、給食ではトマトときゅうりの和え物が出た。「昨日、きゅうりの種まきしたね」と保育士が声掛けすると、D はおそろおそろ口に運び、宣言どおり、これまで自宅でも食べたことのなかったきゅうりを食べた。満面の笑みで完食というわけにはいかなかったけれど(6)、「おいしいね」と言葉にしながらかけることができた(7)。



1歳児クラスの給食では、保育士が子どもたちになんじんときゅうりの種の袋を見せた(8)。前述の1歳児 B も苦手な野菜へのチャレンジが続いている。この日、1歳児 B は和え物のきゅうりを一口食べた。

6月26日 さつまいもの苗植え(0・1・2歳児)

1・2歳児合同で、プランターにさつまいもの種を植える。子どもたちは、にんじん、きゅうりの種まきを経験しているため、「苗はお芋の赤ちゃん」と話すと、すぐに理解したようで、優しい笑顔で苗を見つめる、声を穏やかに小さくする等の変化が見られた。1歳児たちも栽培用の土を丁寧にならし(9)、2歳児 E は「お布団」と言いながら苗に土をかける(10)。2歳児 F は土をかけ終わると苗をそっと優しく撫でていた。



子どもたちがいつでも見られるよう保育室にも苗を置いた。0歳児 G はすぐに気づき、飽きることなく眺めながら(11)、葉や蔓土を指でツンツン触っていた(12)。



7月2日 にんじん制作(0・1歳児)

造形表現の活動にも野菜を取り入れる。手形や足形を取り(13)、葉と根の部分を組み合わせると、1歳児 A は「にんじん」と言ってにこっと笑った。種の袋とともに飾ると0歳児も関心を示す(14)。食も遊びも関連付けて、子どもがより興味を広げ・深める環境をつくるのが大事だと思う。



7月3日 にんじんの草むしり(2歳児)

にんじんの葉の周りに雑草が生えてきたので雑草抜きに挑戦することにした。2歳児には難しい作業である。実際に、にんじんは細い葉っぱ(「とげとげだね」のように葉の特徴を話す)、雑草は丸い葉っぱという特徴を、それぞれの葉を指さしながら伝える。次に雑草抜きを次のようなやりとりで説明した。(保育士のことは「保」、子どもたちのことは「子」で示す)

保「これ、葉っぱね。にんじんさんの栄養取っちゃうからポイね」(つまんで投げる)

保「(雑草を指さしながら)これは？」

子「葉っぱ」

保「そう、葉っぱだからポイね」

保「(にんじんの葉を指さしながら)これ、ポイしていい？」

子「にんじん！」

保「そう、にんじんね。抜いたらダメ、ダメ(両手を大きく振りながら)」



こういったやりとりを数回繰り返し、子どもたちがにんじんの葉と雑草を確実に区別できるようになったところで、雑草抜きを行った。子どもたちは「葉っぱ、ポイ」と言いながら雑草を抜き、自信が無いときには「これは？」と保育士に確認する。集中して取り組んでいた。2歳児も区別のしかたを明確に伝えれば草むしりができる。

7月5日 クッキーづくりの準備(2歳児)

9日と23日、2～5歳児によるクッキーづくりを予定していた。9日のクッキーは3～5歳児が育てた小松菜入り、23日のクッキーは1～2歳児が育てているにんじん葉入りである。5日に2歳児以上を対象にクッキーづくりの際の注意点を話す。爪を切ること、マスク・エプロンなどの身支度や手洗いのしかたなど、写真や動作で説明すると、2歳児も真似をしながら聞いていた。



説明後、2・3歳児はビニール袋を利用したエプロンをつくる(15)。クッキーづくりへの期待感が高まり、お迎えの際に自分から保護者に話す姿が見られた。

大人も準備を進める。給食を委託している会社の調理師さんたちと保育士で当日の段取りについて打ち合わせる(16)。その確認後、調理師さんが当日作成予定の小松菜入りクッキーを試作する。野菜を入れることにより水加減が変わり、生地の高さも変化するため、複数のパタンをつくって試食させてくれる(17)。きめ細やかな対応が本当にありがたい。



クッキーづくり 7月9日:小松菜 7月23日:にんじん葉 (1・2歳児)

9日は小松菜クッキー。2歳児も年上の子どもたちに交じり(18右、19奥)、いっしょにクッキーづくりに励む。型抜きしたクッキーを午後おやつに向けて調理師さんが焼いてくれ(20)、楽しく食べる事ができた(21)。



2歳児Hは、生地の中に細かい小松菜の葉を見つけ、「つぶつぶーっ！」と嬉しそうに練っていた(18)。

23日のクッキーは、1～2歳児が育てているにんじんの葉を入れた。自分たちが栽培している野菜を入れることで子どもたちがさらに興味を持ったり、苦手なものでも食べられるようになったりすることがねらいである。そのため、今日のクッキーづくりには1歳児も参加(22、23)。クッキーづくりに入る前に、生地に混ぜるにんじんの葉を取りに行く。「クッキーにこねこねして入れようね」と保育士が話すと、1歳児Aが「クッキー」と笑った。

せんせい(みてー)

「クッキーこねこねしに行こ～」と呼びかけると、Bは前回のクッ



キー作りで使ったラップ芯ののし棒を使ったことを覚えていて持ってきた。年長クラスから生地をもらい、ビニール袋の上から手で握ってこねる(22)。AとBは型を押して跡をつけると「上手にできた」と言いたげに指をさして「せんせい」と保育士に見せる(23)。おやつの際に、「にんじんさんの葉っぱだね」と言ってクッキーを指さすと、「あったー」「にんじーん」と頷く。いつもよりしっかりとお替わりし、ゆっくりと味わう姿が印象的だった。

2歳児は、今回も年上の子どもたちに交じってつくった(24、25)。自分たちがつくっているにんじんであることを意識できているようで、クッキー生地緑の部分の指さして、「にんじんさん？」と質問する。年上の子どもたちも「ちゅうりっぷさん(2歳児クラス)のにんじん？」と関心を示してくれる。この言葉に2歳児 I は誇らしげな表情をした。この表情が意味するものは「自分たちが育てているにんじん」という“じぶんごと”の意識と考える。また、食べる前に E が発した「E のにんじん、入ってる？」も同様である。2歳児たちにとって野菜栽培が主体的な活動になってきたのだとみなせる。2歳児たちは、作業中、クッキー生地から甘い匂いがすることに気づき匂いを確かめていた。こねる作業や型抜きが上手いかなくても何度も挑戦して次第に上手になっていた。おやつの時間はとても満足そうな笑顔(26)。I は「ちゅうりっぷさんの(にんじんが入ったクッキー)おいしい！」と言葉にしながら味わっていた。



ちゅうりっぷさんの、おいしい！

7月13日 保育参観:じゃがいも掘り (全園児・保護者)

今年度の食育計画の立案時に、保護者との関わりにおいても、できるだけ畑の活動や野菜栽培を盛り込むことを職員で話し合っていた。そこで今年度の保育参観は全員でじゃがいも掘りと小松菜採りを行った。じゃがいもは、2歳児以上の子どもたちで種いもを植え付け、小松菜は3歳児以上の子どもたちが種を植え、育ててきたものである。



日常保育の中でも子どもたちは楽しそうに畑活動を行っているが、保護者と一緒に芋ほりをする様子はいつもと違った表情。保護者にも子どもたちの日常的な活動の一端を体感してもらえたと考える。園で行う畑活動や、育てた野菜について家庭でも話題になれば、子どもたちは食について一層関心を持つだろう。

7月31日 「おいになったね(大きくなったね)」(1歳児)

畑の活動に熱心な1歳児 A は、畑に行くと、にんじんの葉をふわふわと手で撫でるように触りながら「おいになったね(大きくなったね)」と話す。触る様子や言葉から、愛着を持って、にんじんの生長を感じているのだと見えた。

8月19日 忘れていない雑草抜きのコツ(2歳児) 「(抜いても)いーい？」(1歳児)

にんじんの水遣りをするために畑に向かった。2歳児たちは少し遠くからでもその生長が分かるらしく、子どもたちは「大きくなってー！」と近づいた。草むしりを手伝ってほしいことを保育士が伝えると、雑草とにんじん葉の区別を伝えなくても、子どもたちは区別することが必要なこと、にんじん葉以外の雑草を抜き取ることを覚えており、草むしりを始めた。間違えてにんじん葉を抜いてしまう子どもはいなかった。日々の観察と、興味・関心が子どもたちの学びを支えているのだと思う。

(抜いても) いーい？



土の上にオレンジ色の部分が出てきたのを見て、1歳児 A は屈んで指を差しながら「いーい？」と抜いていいかどうかを保育士に尋ねる(27)。「もう少し大きくなったらね」と答えると、納得した表情でうなずく。にんじんの生長への期待が感じられる。

8月20日「きゅうりの赤ちゃん、大きくなったかな」(2歳児)

にんじんに水遣りをした際、大きくなったオレンジの根の部分が見えると、子どもたちは「にんじんさん、見えた！」と嬉しそうに伝えに来る。明日収穫することを伝えると「うんとこしょ！だよ」と、絵本「おおきなかぶ」のイメージを持って友だち同士で話し合っている。とても楽しみにしている様子だ。すると、H が思い出したように言う。

H「きゅうりの赤ちゃん、大きくなったかなあ」

保「どうかなあ。あ、E は(お休みして)見ていないから、きゅうりの赤ちゃん知らないんじゃない？」

H「じゃ、教えてあげればいいんじゃない？」

保「そうだね。見に行かなきゃね」



(きゅうりの赤ちゃん)これー

園庭に戻り、H は E に「これー」と、実った小さなきゅうりを見せていた(28)。みんなで栽培しているという共有の気持ちを感じられた。

8月21日 にんじんの収穫(0・1・2歳児)

今日はにんじんの収穫日。0・1歳児も収穫バッグを持って畑に向かう。A に「どれにする？」と声をかけると「おっきいの」と言いながら目に付いたにんじんを指す。このにんじんが途中で折れてしまったため、次のにんじんを抜いたが、自分が考えていたよりも小さかったようで不満そうな表情の A(29)。大きい・小さいという概念が理解できている。

この、にんじんはおおきくない



2歳児たちは生長過程を観察してきたにんじんの収穫をとても楽しみにしていた。上手に力を入れて抜き取れる子、葉っぱだけが抜けてしまう子、力を入れすぎてしりもちをついてしまう子と様々。何度も行っているうちに上手に抜き取れるようになる。体験からの学びである。「とれたー！」「見てー」「おうちにもってくー」「ちっちゃい」など抜きながらそれぞれの思いを言葉にしていた。畑で育てたにんじんは、スーパー等で売っているものとは違い、細いもの、三又に分かれているもの、かなり大きく育ったもの等があり、それぞれの形や大きさの違いを見せ合ったり笑ったりしながら楽しんでいた。



収穫したにんじんを洗うのも子どもたちが行った(30)。調理師さんに茹でてもらう(31)、おやつに出してもらうと、子どもたちは何もつけずに食べ始めていた(32)。にんじんが苦手な D も自分で収穫したことから食べることができて嬉しそうなお様子である。お迎え時にも誇らしげににんじんを見せて報告していた。



9月3日「きゅうりは、足、ないんだよね？」(2歳児)

野菜の絵本の読み聞かせをしていると、きゅうりの絵に足が描かれていた。

2歳児 H「きゅうりは、足、ないんだよね？」

保「本当だね。(絵本の野菜を指さして)足、あるね！」

2歳児 I「とげとげ？」(前後文脈から「新鮮なきゅうりのとげとげが伸びた？」の意味と捉えられた)

保「そうかもね。伸びて足になったのかな？」

自分たちの知っているきゅうりには足が無いけれど、絵本に描いてあるということは足になる部分があるのかもしれない。そんな2歳児なりの現実認識や想像・推論の思考を見ることができるやりとりである。畑活動のような実体験は、実際には無い豊かな想像世界を広げる際の土台にもなると感じた。

9月6日「畑さん、ありがとっ！」(0・1・2歳児)

にんじんの畑のあとかたづけをした。支柱を抜き、囲んであったビニールテープを取り除く作業である。保育士と一緒に1、2歳児たちも積極的に片付けた(33)。「にんじんをつくってくれた畑にありがとうだねー」と保育士が言うと、2歳児 F は「畑さん、ありがとっ！」と言いながら草むしりをしてきれいにしていた。最後はみんなで倉庫まで支柱を運ぶ。1歳児 J が「わっしょい、わっしょい」と言い始め、みんなも同じように掛け声を合わせて支柱を運んだ(34)。収穫で終わりにせず、あとかたづけまで体験できたことは大変良かったと思う。1歳児も2歳児も、発言や行動から、自分たちが育てたにんじんへの愛着や畑への感謝の気持ちがあることがわかる。

わっしょい、わっしょい！



9月10日 きゅうりの収穫(0・1・2歳児)

プランターのきゅうりを収穫する(35)。きゅうりの観察に行くことを伝えると、2歳児 I は「チクチク(とげ)あるよー」と反応する。以前話した新鮮なきゅうりにあるとげのことを覚えており、友だち同士で話し始めた。先週に比べて生長したきゅうりを見て、2歳児 H が「おっかい」と嬉しそうに触っている。

1歳児たちはおやつに出してもらえよう収穫したきゅうりを給食室に運ぶ(36)。きゅうりがおやつに出た(37)際、「今日、もも組さん(1歳児クラス)採ってきてくれたきゅうりだって！」と声掛けすると、野菜の苦手な2歳児 D はきゅうりを自分で持ち食べ始めた(38)。



D、食べた！

H「D、食べた！」(38)

保「本当だー、D すごい！」

D「D、食べた〜」

保育士や友だちにほめられて、D は嬉しそうに少しずつ食べ進め完食した。周囲の励ましや自分が栽培に関わった体験が苦手な食材にもチャレンジする気持ちにつながっている。

10月2日 きゅうり栽培のあとかたづけ

きゅうりの収穫が終わったため、フェンスに残っている茎や蔓を取り除き、プランターを片付けることにした。「や



ってね」のような指示をしなくても、2歳児たちは保育士たちの動作を見て真似しながらかたづけに参加する(39)。蔓や茎を畑にあるコンポストまで運び入れた。保育士から「中に虫さんもいるね。ここに野菜のゴミを入れると、畑の栄養になるんだよ」という話を聴きながら、覗いて虫を見つれたり、蔓の上に土を掛けたりしていた(40)。保育士が「また、みんなで、にんじんの種まきしようか」と話すと、目を輝かせるように子どもたちは保育士を見た。Iは「赤ちゃん？」と反応し、種まきの意味を理解しているようだった。

10月9日 再び、にんじんの種を蒔く

今年2回目のにんじんの種まきをした(41)。以前の栽培の時のことを思い出して、「とげとげの葉っぱ？」「赤ちゃんにお布団」など言葉にしながらか作業する姿も見られた。体験を繰り返すことができ良かったと思う。

子どもたちは農作業を楽しむだけでなく、お芋の蔓で綱引きをする(42)など遊びのバリエ

ーションも広がっている。野菜を育てて、遊んで・学んで、しっかり食べることにより、子どもたちは大きく育っている。



おわりに

今年度の食育計画の方針である、

つくる → たべる → たのしい → またつくって食べたい! → つくる

について、「野菜をつくる」「クッキーをつくる」といった複層的な意味で「つくる」を実現し、野菜栽培を中心とした食育活動を実践することができた。この活動における子どもたちひとり一人の姿や言葉を見ていると、冒頭に述べたとおり、1・2歳児でも活動を通して、野菜に対する興味・関心や、慈しみ育てるといった感情、「自分たちで育てる」「自分たちの畑」という主体性につながる意識を持てるという考えは妥当であったことがわかる。子どもたちの、自分より小さい子たちへの優しいまなざしからヒントを得た「種は赤ちゃん」という見立ても今回の活動に重要な役割を果たした。種から芽が出て大きくなるのは赤ちゃんが育つと同じことであり、活動を通して水や土などが必要であることを子どもたちが感じていると思われる場面が多数あった。とくに、1歳児が理解できたことが行動や反応となって見られたことは、私たちにとっても意義深い体験だった。

今回の活動では、各家庭との情報共有ができたことも良かった点だと思う。玄関に子どもたちの写真を掲示したり、収穫した野菜を自宅にも持ち帰ったりしていたため、子どもたちは園でも家庭でも野菜の話をするのができ、より興味・関心を高めることができた。

12月現在、にんじんとかぶの栽培は続いている。6月時点では、保育士に抱っこされて見ているだけだった0歳児たちも、現在では畑活動に参加している。1・2歳児と同様に、野菜を優しく見守りながら、食に意欲と関心を持つようになってほしいと感じている。



謝辞： 昼食やおやつづくりに留まらず、子どもたちの食に関する学び・育ち全般にいつも快く協力して下さる株式会社サンユウの調理師・栄養士の先生方に心から感謝いたします。